

# 「すごい書道やってた？」

デイサービス施設に出前教室



書道部

ボランティア最前線

(左から)島ノ江さんと元田さん

「うまーい、格好いい。若いころ習字やってたのかな」、「えへへ、きれいに書けたやろ」一。温かいことばが教室に飛び交います。

5月14日、グループわ 書道部(鐘築重治代表=国7)のデイサービス施設「ひまわりの家」(灘区都通り)での書道教室に取材に伺いました。この日の講師は元田弘忠さん(生9)と応援の島ノ江繁吉さん(生18)。参加者はデイサービスに通うお年寄り22人。

この教室は平成17年から毎週土曜日、午後1時30分から午後3時まで開催。12年目です。元田さんのほかの講師は川畑隆さん(生15)。2人で交代で月に2回づつ教えています。

講師はあらかじめお手本を書いてきて、教室の前に張り出します。きょうの課題は「志操堅固」「はる

「旅に出る」「君子三楽」「神秘」の五つ。課題の意味は講師が説明。「三楽」とは①親兄弟が健在なこと②天に恥じないこと③英才を教育すること一です。施設の職員は筆、墨汁、半紙、下敷き、下敷きの下にしく新聞紙を用意。お年寄りはお手本のコピーを手元に置き、さっそく練習を始めます。

80歳代半ばの男性は90分間に7枚を書きあげました。

「習字は元々、好き。昭和12年、香川県の旧制三豊中學生のころ、有名な書道家で、国定小学書方手本を書いた鈴木翠軒先生に手ずから教えて頂いたのが忘れら

れない」と言います。ある女性は自分の書いた書を見せ「先生、上手と言うてよ」と催促。別の女性は「家で練習しようと思うけれど、中々出来ない。準備をするのがおっくうで」と。

生徒が提出した半紙の字を赤筆で添削する2人の講師の机の前に多い時では7、8人が並び、額に汗を滲ませながらの奮闘。元田講師は「生徒さんが一生懸命なので張り合いがある」と言います。

施設の山岸主任は「昔は、幼いころから習字に親しんでおり、書道を楽しんでいるよう。1人暮らしの人が大半で、日ごろは会話がない。ここに来て字を書きながら仲間とおしゃべりし、人と触れ合うのが大切。講師に来ていただいて大変ありがたい」と話していました。

◆書道部 文化部に所属、会員40人。毎月3回、現役学生19人としあわせの村研修館などで練習。高齢者福祉施設や児童館などを訪問、習字や書き方指導ボランティアをしている。現在16施設で月に1回~4回、1回につき1~3人が担当する。毎回平均15人の受講者があり、平成27年度は約3300人が受講した。クラブ員は「書道は一生つきあえる趣味。体が弱って出歩けなくなった時でも続けられる」という。年に2回、検定試験がある。初心者には書道を始めて2年ぐらいで初段になるそうだ。(取材、写真 広報・永野知己)